



## 陰ながら積む「天への貯金」

こんにちは。毎回楽しみに読んでおります。  
今回の信頼貯金のお話について少々。

職場でも最近「誰かのために頑張ろう」ということが言われるようになりました。大人に向かってこんな当たり前のことが言われる背景には、社内の競争を制して、他人を蹴落としてでも成果を出すことが長らく評価されてきたという状況があります。しかし、これでは持続性がなく、全体最適にならないと会社も気づいたわけです。

何が良い行動かについては議論の余地があるかもしれませんが、よく言われるように「利他」であることが新しい時代のリーダーに求められる資質であることは間違いのないと思います。学校や家庭でも、情けが思わぬ形で返ってくる経験ができれば素晴らしいなと感じました。

ペンネーム「ブラいち」さんより

ブラいちさん、投稿していただきありがとうございます。

「情けが思わぬ形で返ってくる経験」をさせてあげたいとの思い、私も全く同じです。

そのことを小さいうちからはっきりと体感できたならば、今後の人生を歩む上での素晴らしい財産となると思うからです。

ちなみに、「利他の行い」や「善行」などの素敵な取り組みは、「見えないようにするのがさらにカッコいい」ということを伝え始めているところです。

いわゆる「陰徳」のことですが、この言葉だけでは伝わらないので、「いいことって見えないようにすると更に沢山の信頼貯金が貯まるんだよ」という形で紹介していくつもりです。

ちなみに「陰徳」は、小学校の辞書にもちゃんと載っています。

## 陰徳：人や世に知られず、ひそかに行う善行。

これは、銀行業界の元祖である安田善次郎が、幼いころから父親に叩き込まれた言葉でもあります。

「人に褒められようとして善行を施すのではなく、誰にも知られずとも人のためになることを黙々と行おう。」

ということです。

陰徳を積むことは、いわば天への貯金です。

これは、実業家や経営者だけでなく、その道の第一線を走る人たちが積極的に行っていることでもあります。

「運をつかむ」という言葉がありますが、陰で良い行いをすることが結果的にめぐりめぐって自分の力を大きく開花させることを、先人たちは知っていたのでしょ。

まさに、「情けは人の為ならず」ですね。

しかし、こうしたことは、教えなくては出来ない場合がほとんどです。

自然と出来るようになる子は、むしろ少数派といえるでしょう。

だからこそ、明確に中身や方法を伝え、できた時に認め褒めることが大切だと思っています。

基本的に、幼いころは誰もが「利己的」です。

自分のことしか考えられません。

赤ちゃんの頃などはまさにそうです。

少しでも不快なことがあれば泣き叫びます。

自分のストレスを取ってもらうこと、自分の喜びを満たしてもらうことだけを求めて行動します。

「お母さんが困っているからこころで泣くのをやめよう。」

「お乳をせがむ回数が多すぎるな。今日は少し我慢しておこうかな。」

「今日はお母さんが疲れ気味だな。僕の笑顔でたくさん癒してあげよう。」

「毎回おむつを替えてもらって誠に恐縮です。感謝の気持ちで一杯です。」

こんな風に思いやり深い、慈愛の精神にあふれた赤ちゃんは存在しません。

そして、人の喜びを想う「利他的」な行動ができるようになるか否かは、どんな人と出逢い、どんな経験を積んできたかによるところが大きいです。

以前も書いたかもしれませんが、心は勝手には育ちません。

もちろん、子どもたちの「体」は、日々すくすくと成長していきます。

極度の栄養不良などの極端なケースをのぞいて、基本的に子どもたちの体は自然と大きくなっていきます。

日毎にたくましくなっていく子どもたちの「体」の様子を見て、「心」も同じように自然と成長していくものだと思い込むケースは多いように感じます。

しかし、これは違います。

体と一緒に心も自然と育つならば、大人になれば誰もが聖人君子です。

残念ながら、利己的にしか動けない大人も世の中には沢山います。

そして、すでに立派な生き方を体現されている人であっても、心を整えたり、心を高めたりするために、様々な努力を積んでいたりします。

滝に打たれたり、燃え盛る炎を我慢したり、お経を読んだり、利他の行いを積んだり、瞑想したり、呼吸法を工夫したり…。

他にも、〇〇セラピーや〇〇療法などもあげたらきりはありません。

心とは意識的に磨いていこう、高めていこうとしない限り、育ってはいかないものなのだと思います。

そして、心を磨き高める経験には、いくつか種類があります。

怒りを制したり、努力を続けたり、恐れに挑んだり、失敗を乗り越えたり、違いを受け入れたり、誰かに寄り添ったり…。

こうした経験を一定量経ることで心は磨かれ、高まっていきます。

「信頼貯金」や「天への貯金」は、そうした経験を得ていく上での一つのきっかけであり、一つの工夫であるともいえるでしょう。

そして、実際にそうした目に見えない「信頼」や「尊敬」などが、見える世界に甚大な影響を及ぼしていることを分かりやすく伝えることも、教育の大切な役割なのだと思います。

それこそ、ブライチさんのおっしゃるように、現代においてはその重要性はますます増してきている側面があるでしょう。

ちなみに「天への貯金」や「信頼貯金」のような話は、実は何百年も前から、日本だけでなく世界中で受け継がれてきたことです。

日本語に限定しただけでも、関係している言葉がこれだけあります。

因果応報 自業自得 身から出たサビ 自分で蒔いた種 ツケが回って来る

上の語群は、今ではたいてい悪いケースに使われます。

しかし、元々の言葉の意味は違います。

例えば因果応報という言葉。

これは「原因」に応じた「結果」が訪れる、という意味の言葉です。

その原因には、2つの種類があります。

よい原因を「善因」、悪い原因を「悪因」といいます。

善因には良い結果が現れ、悪因には悪い結果が現れる。

ですから、因果応報は「善因善果」「悪因悪果」とも表現されるのです。

自業自得も同じです。

自業は、「自分の行い」という意味です。

自分の行いによって、結果が変わるという意味です。

良い行いには良い報いが、悪い行いには悪い報いがあるということなのです。

身から出たサビは、「刀」から生まれた言葉。

普段は切れ味の良い名刀も、手入れを怠ればたちまちサビてしまいます。

刀を心に見立て、自分の行った悪い行いによって自分自身が苦しむことがあるという意味がこめられました。

でも、手入れをすれば問題ありません。

毎日磨くという行いこそが、善行を積むことであり、陰徳を積むことであるのでしょ。

こうした一連の要素を、一言でまとめた熟語も存在します。



教室でも、教室以外でも、子どもたちの陰ながら善い行いを積む姿が日毎に増えてきています。

そんな姿をご家庭でも見つけた時は、ぜひまたお知らせください。

子どもたちの内なる成長を、お家の方々と共に喜べたら嬉しいなあと思っています。

そして、その子どもたちの周りにいる我々大人が、利他の行いの素晴らしさを発信し合えるようになっていけたならば、これほど教育環境において素晴らしいことは無いだろうとも思っているところです。

利他にまつわるご家庭でのエピソード、職場でのエピソードなどあればぜひおしえて下さい。

**☆ ↓ 読者ページはこちらから ↓ ☆ ご意見ご感想など気軽にお寄せください**

<https://docs.google.com/forms/d/1qqf4cPLcjpcWaimWdu-6IFM73JahODYK4ROldg7jLxM/edit>



それから「ブラいち」さんのペンネームでピンとききましたが、つい一昨日の5月7日は、偉大な作曲家・ブラームスの誕生日でしたね。

実は、私が最初に演奏した交響曲が、ブラームスの1番でした。

「ブラームス交響曲第一番」、演奏者の間ではこれを略して「ブラいち」と呼んでいます。

過去に演奏したシンフォニーの中でも、最も好きなのがこのブラ1でして、私が以前に宝物として紹介した楽譜もブラ1のものでした。

この一曲は、構想から完成まで21年もの歳月を要したことで有名です。

ベートーベンが書いた9つの交響曲に憧れ、それを乗り越えようとしたブラームスの苦悩や葛藤がその21年に込められていると言われていました。

そして、ようやく初演を迎えた時に、その曲の素晴らしい仕上がりから「ベートーヴェンの交響曲第10番」と評されたことも、音楽史に残る有名な逸話です。

それを、私は高校3年生で初めて弾きました。

現役生活最後となる卒業演奏でのメインプログラムです。

今でも、この曲を聴くと当時を思い出して胸が熱くなります。

みなさんの思い出に残る一曲も、どこかで教えて貰えると嬉しいです。